

人は、生まれてからほぼ十年間の体験を基に人生脚本をつくり上げる。

「自分はどのような人間で、これからこのように生きていくだろう」という漠然とした人生のシナリオだ。人は、その脚本に気づいて書き換えをするまで無意識につくり上げた脚本に沿って生きていくため、生後十年までの家庭や地域の環境、それらを取り巻く時代環境の影響は大きい。

自己肯定で生きるのか自己否定で生きるのか、その大きな分かれ目は、あるがままの自分を受け止めてもなかったことがあるかにかにある。それは親でなくともいい。近所の人、身近な自然、ペット……何かに自分を受け止めてもらった体験があれば、心に火を灯して生きていける。特に、自分の気持ちを聴いてもらえた人は、自信を持って人生を歩いていける。なぜなら、気持ちとは自分自身だからだ。

さて、秋葉原通り魔事件の犯人の残した自己否定の強いコメント及び、弟の告白によって家庭環境に注目が集まった結果、その親世代である五十代（一九五〇～五七年生まれ）シ

子どもを追い詰める 「価値」の押しつけ

親のつくったレールの上を走らされてきた50代は、時代に流される中で、自らが主として守るべき、「安らぎの場」であるべき家庭を崩壊に導いている

●中尾 英司 家族カウンセラー

なかお ひでし／1958年生まれ。北海道大学卒業。84年、協和発酵工業入社。同社での組織改革を「あきらめの壁をぶち破った人々」（日本経済新聞社）に著して独立。2005年に酒鬼薔薇の心の闇を解き明かした「あなたの子どもを加害者にしないために」を出版と同時に中尾相談室を立ち上げ、全国を訪問カウンセリングしている。

ラケ世代」がクローズアップされているようだ。この二十代と五十代がネットカフェ難民の双壁であることをご存じだろうか（厚生労働省調査より）。この現象は一体何を物語っているのだろうか。

「自分を位置づけたい」

五十代の親である昭和一桁世代は、

お国のための道具として「戦死」に向かつて生きた世代である。「産めよ殖やせよ」の時代で兄弟も多く、自分のことを十分親に受け止めてもらえなかった。国からも親からも愛情をもらえなかった昭和一桁は、無重力空間に放り出されたかのように孤独に漂って不安で心許ない。

そのため、時間的にも空間的にも、どこかに自分を位置づけたいという衝動が働く。だから制度やルール等、形の整備、年功序列は心の安定のためにも必須だった。元々曖昧な時間を生きていた日本民族が、世界に冠たるパンクチュアル（時間に正確）な鉄道網をつくり上げることができたのも、時刻通りであれば安心するけれど、時刻が違えばイライラするという存在不安の裏返しであった。自分が安心するために緊密な社会システムをつくり上げた昭和一桁は、我子とそのレールに乗せようと圧力をかけた。自分の中にある不安を見たくないために、生活以上にシステムの維持が第一優先なのである。押しつけられた子どもは選択の自由を

失う。人生は選択の連続であるから、その自由を失うことは人生を奪われるのと同じことである。自分の人生を歩めない五十代が「無気力、無関心、無責任」の三無主義に陥るのも無理はなかった。

また、親に気持ちを受け止めてもらっていない昭和一桁は、心のコップの中に吐き出せない感情をパンパンに溜め込んでいる。子どもの気持ちを受け止める余地がないので、シラケ世代もまた親に受け止めてもらえない不安を持つこととなった。ここに存在不安が世代間連鎖することになる。

押しつけられたレール

その五十代の目の前には、昭和一桁がつくり上げたシステムを効率化していった団塊世代がいた。彼らは、「私つくる人、あなた食べる人」というように性別分業を完成させ、「ニューファミリー」と喧伝されて核家族という形を完成させた。後を継いだシラケ世代は、「男は仕事、女は家事、子は受験」という完成モデルの上を突っ走ることとなった。そし

て、同世代が二十代社会人としてフ
 レッシュな頃、社会は「カラスの勝手」
 「赤信号みんなで渡れば怖くない」
 (八〇年)とマナーのためには何で
 もありのモラル崩壊に突入していく。

同世代が親になり始める頃は、日
 航機墜落事故(八二年)が「心身症」
 という言葉を社会に認知させ、組織
 が人を追い詰めていることを知らし
 めた。「積木くずし」(八三年)は家
 庭の危機を教え、女子高生コンクリ
 ート詰め殺人事件(八八年)は家庭の
 空洞化を浮き彫りにし、神戸戸塚高
 校校門圧死事件(九〇年)は学校の
 非人間化を示した。九一年には利潤
 追求のために安全を無視したが故の
 信楽高原鉄道事故が起こっている。
 七十代、六十代、五十代と、心を疎
 外された人々が社会の中核を占める
 ようになって、必然的に現れた現象
 といってもよいかもしれない。

昭和一桁の価値の押しつけを嫌が
 り、団塊世代の政治闘争にシラケた
 世代は、人を道具として扱う会社
 も裏切られ、何が正しくて何が正
 しくないのかわからないままお祭り

騒ぎのバブルへ突入していく中で、
 信用できるものを求めてブランドを
 めざすようになる。心で生きていな
 い人は、何か自分を支えるものに
 がみつくだ。折しも社会のモラル
 崩壊を映すの鏡のように学校が荒れ
 始めた結果、お受験や中学受験が加
 熱していくことになる。親からの押
 しつけを嫌がった同世代だが、我子
 にも価値の押しつけをすることに
 なった。

崩壊した最後の砦——家庭

昭和一桁(第一世代)、五十代(第
 二世代)ともに、子どもの気持ちを
 受け止めずに価値の押しつけをする
 という子育てをするのだが、その家
 族を取り巻く環境は大きく変化した。

五十代の小さい頃には子ども社会
 があつた。しかしその後、家族が地
 域から分離された結果、子に対する
 親の影響力が圧倒的に大きくなった。
 完璧な人間等どこにもいないからこ
 そ、親の影響を相対化するために家
 が地域に開放されている必要があつ
 たのだが、いまや家は価値閉塞空間

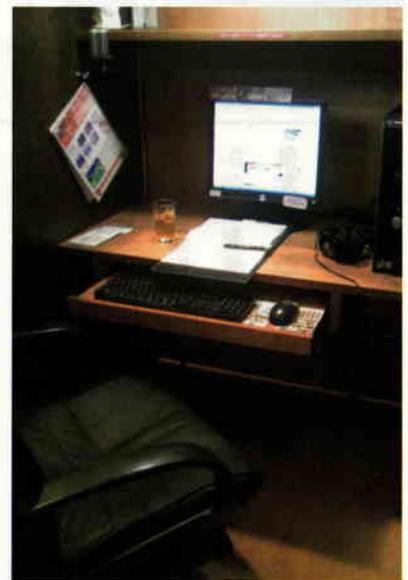
になってしまった。密室の
 中で価値が暴走し、事件に
 まで至るようになってし
 まったのである。

そして、世を震撼させた
 神戸連続児童殺傷事件(九
 七年)が起きる。心を疎外
 し続ける中で、ついに第三

世代から殺人ゲームが起きてしまつ
 た。自分の存在を無視され続けてい
 る人間はストローク飢餓に陥る。ス
 トロークとは、相手の存在を認める

働きかけのことで、目を見たり、傾
 聴したり、抱きしめたりすることも
 ストロークである。人がストロークを
 求めて仕掛けるものをゲームという。
 ところが、日本社会はここで間違つ

た方向に転換した。ゆとりとは名ば
 かりで、規制緩和(九八年)による
 仁義なき競争戦争へと突入したので
 ある。「自己責任」という言葉と相まっ
 て「だまされるほうが悪い」という
 風潮ができていく。心理学的にいえ
 ば、政治がモラルをなくす「許可」
 を与えたのである。九八年を期に、
 以降十年に渡って自殺者数が三万人



ネットの工利用で、住居喪失で非正規労働者である
 五十代は、全利用者の二六・五%、同一世代は七二・三%

を超え続けていることは、この政策
 が人間を追い詰めていることを示し
 ている。

無条件に相手を認め合う最後の砦
 であるはずの家族。その家族の中心
 であるはずの五十代と二十代がとも
 にネットカフェに漂泊する姿は、心
 のコップが一杯で、誰も受け止め手
 がないことを示しているように思
 える。日本の家庭は崩壊しつつある
 のではなく、すでに崩壊してしまっ
 ているのではないだろうか。

もはや仁義なき競争戦争を終わら
 せなければならぬ。社会がモラル
 を取り戻さなければならぬ。心の
 通い合うペースで生活しなければな
 らない。成長を追うのはやめよう。
 幸福を取り戻そう。